



# Plan S

Making full & immediate  
Open Access a reality

NII / JPCOAR による共同翻訳

## 責任ある 出版に向けて: cOAlition S からの提案

2023年10月31日

[www.coalition-s.org](http://www.coalition-s.org)

DOI: [10.5281/zenodo.8398480](https://doi.org/10.5281/zenodo.8398480)

# 責任ある出版に向けて： cOAlition Sによる草案に向けて 研究コミュニティからの意見募集

cOAlition S（完全かつ即時のオープンアクセスの実現に向けた、研究助成機関および研究機関の国際コンソーシアム）では、21世紀のオープンサイエンスにふさわしい、コミュニティベースの学術コミュニケーション・システムを構築するための提案について、世界中の研究コミュニティから意見を募集中。

## 1

### はじめに

「新しい研究は、過去の研究によって確立された成果の上に成り立っている。新しい科学的発見がそれまでに確立された成果の上に築かれるという連鎖は、すべての研究成果が科学コミュニティにオープンに提供されることで初めて最適に機能する。」

Marc Schiltz, "Why Plan S", cOAlition S (2018)  
[www.coalition-s.org/why-plan-s](http://www.coalition-s.org/why-plan-s)

プランS原則の発表から5年が経過し、完全かつ即時のオープンアクセス（OA）に向けた動きは、世界的かつ不可逆的なものとなった。しかし、学術出版の慣行は、科学が実践され、オープンに普及・利用されるようになった今日の急速な進歩に追いついていない。このギャップが、研究成果の全面的なOA化という目標をますます脅かしている。

新型インフルエンザ（COVID）のパンデミックを機に、より迅速で効率的な出版モデルの必要性が明らかになった。SARS-CoV2に関わる重要かつ緊急に必要とされる科学情報を広めるには、従来の出版システムではあまりにも時間が掛かりすぎた。これを受けて、世界中の研究者が、新しい研究成果の普及と査読を改善するために、新しい出版方法を取り入れつつある。研究者たちは、査読の前に論文を共有し（プレプリント）、プレプリントのオープン査読に参加するようになってきている。さらに、ラテンアメリカなどの研究機関や研究者は、「ダイヤモンド」出版と呼ばれる、著者や読者に無料で研究者主導の出版サービスを提供する、革新的なモデルを推進している。

こうした動きを受けて、助成機関やその他の関係者、特に研究者に代わって出版サービスを調達する大学図書館は、責任ある公平で持続可能な方法で研究の普及を支援するための最善の方法について考え直す必要に迫られている。

本文書では、将来の学術コミュニケーション・システムが目指すべきビジョンと一連の原則を提案し、研究助成機関が、その他の主だった関係者と協力して、これを実現できるようにするためのミッションを示す。

しかし、そのような研究者主導のシステムを成功させるには、研究コミュニティからの幅広い支持が必要である。ここに示す提案が研究者コミュニティの支持を得られるものかどうかを理解するため、cOAlition Sでは、科学技術研究センター（CWTS）とのパートナーシップのもと、Research Consulting Limitedの支援を受けて、研究者が意見を述べ、彼らのニーズに合った提案の策定に参加する機会を提供するために、コンサルテーションプロセスを開始する。コンサルテーションの詳細については、**第8項**を参照されたい。

提案の改訂版は、今回のコンサルテーションプロセスを通じて得たフィードバックを基に、2024年6月のcOAlition S助成機関による検討に向けて策定する。

## 2

# 学術コミュニケーションはなぜ変わらなければならないのか

現在の学術コミュニケーション・エコシステムの問題点については多く論じられているが、それらは以下の4つの重要な課題に集約されると考えられる。

### 2.1

#### 主流な出版モデルは極めて不公平である。

圧倒的多数の学術ジャーナルが、購読料、論文掲載料（APC）、もしくはその両方によって出版費用をまかなっている。その結果、研究者は、（購読料が有料のために）関連する研究成果にアクセスできなかつたり、（APCの壁のために）出版できなかつたりすることがある。出版に費用がかかることは十分に理解するものの、著者に課金されることなく、すべての研究者がオープンアクセスとして研究成果を出版できるようになるべきだと考える。

### 2.2

#### 研究成果の共有が不必要に遅れる。

研究の発展は、その成果が共有されるのと同じ速さでしか進まない。現在の出版前の査読モデルでは、「出版」の決定が下される前に修正を行う必要があるため、これが出版の遅れの一因となっている。その結果、一部のジャーナルのオンライン出版では、論文やジャーナルが印刷され郵送されていた時代よりも時間がかかることもある。インターネットとデジタル技術の時代において、新しい知識がパブリックドメインに公開されるのが12ヶ月も遅れること（これは出版前に査読が行われる場合には珍しくない時間枠である）は、プランSが撤廃した12ヶ月間のオープンアクセス出版禁止と同様に、科学と社会にとって弊害である。

### 2.3

#### 査読の可能性を最大限に活かしきれていない。

査読は、新しい科学知識の品質管理と文脈を確保するために、現在利用されている主な方法である。残念ながら、その守秘性のため、査読者の努力や洞察が見えにくくなっていることが多い。論文が却下されると、その情報は失われ、プロセス全体を別のジャーナルで繰り返さなければならない。このような重複的かつ非公開の査読プロセスは、よく言っても、それ以前の査読報告書から得られた洞察を無駄にするものであり、悪く言えば、著者、査読者、編集者の品質管理や説明責任を蝕むものである。

さらに、査読報告書や編集者の評価にアクセスできない状態では、学術的対話の理解に貢献することも、また、ジャーナル名やインパクトファクターのような間接的な指標ではない、本質的な価値に基づく責任ある研究評価を支援することもできない。

### 2.4

#### 編集によるゲートキーピングと研究者のキャリアインセンティブの結びつきが、科学にダメージを与えている。

論文の不採択、再投稿の繰り返し、および編集上の選良主義と研究者の学術的上昇志向（キャリア上のインセンティブ）との結びつきが、ジャーナルの過度な序列化を助長してきた。不採択率の高さや大幅な修正の要求は、科学者、特に論文発表にかなりの労力を費やさざるを得ないキャ

リアの浅い研究者に不必要な負担を強いている。このように、現在の出版状況は、学術研究における次世代の科学者のウェルビーイングや存続を脅かしている。  
このような問題への解決策は、以下に述べるような、研究者主導によるコミュニケーション・エコシステムであると考ええる。

# 3

## 対象範囲

本文書では、研究論文（基礎となる研究データを含む）および関係するコンテンツ関連要素（査読報告書、著者の回答、編集上の決定／評価など）を流通する学術コミュニケーションに焦点を当てる。研究論文以外の成果物（モノグラフなど）も重要であるが、これらは現在、対象範囲外とする。この文脈では、オープンサイエンスの概念は、ユネスコ「オープンサイエンスに関する勧告」の定義に従い、すべての研究分野を含むものとする。

# 4

## ビジョン



私たちのビジョンは、21世紀のオープンサイエンスにふさわしい、コミュニティベースの学術コミュニケーション・システムである。このシステムは、研究者が自らの研究成果のすべてを共有し、これらの成果に対する新たな品質管理のメカニズムや評価基準に参加することを可能にするものである。このアプローチにより、質の高い科学知識が迅速かつ透明性をもって普及することが保証される。

研究とは、社会の利益となる信頼できる知識を創造するために、研究結果を生み出し、それを検証するという社会的な事業である。この普及と対話による社会的プロセスは、できるだけ多くの参加と知識の交換によって発展するものであるため、研究助成機関や研究機関では、研究結果がオープンにできるだけ早く共有されることが研究と社会のために最も役立つという「オープンサイエンス」の概念を推進している。

しかし、こうした「オープンサイエンス」への期待は、研究プロセスの一時的な断片、つまり査読を経た最終的な出版物に価値をおく、従来のビジネスモデルやインセンティブ構造によって妨げられている。

研究者は、研究を加速させ、フィードバックや再利用のために自分の研究を公開したいという思いに基づいて、いつどこで自分の研究を発信するかを選択できるべきである。そのような研究者主導による研究成果の新しい発信方法は、研究プロセスをより反映するものであり、その過程でフィードバックや評価の機会を提供するものである。

ここでは、学術コミュニティによってすべてのコンテンツ関連要素（一次研究論文、査読報告書、編集者の決定、通信欄など）が管理され、それに準拠する出版イニシアチブを、研究者主導のコミュニケーションと定義する。

このアプローチでは、研究者は閲覧や出版に料金を課されず、成果物の所有権を保持し、自由に共有する権利を有する。

## 原則

上述のビジョンは、以下の原則によって支えられている。

### 原則 1

**著者が研究結果の普及に責任を負う。**

いつどこで出版するかは、査読前後のバージョンや関連する査読報告書も含めて、出版社などの第三者ではなく、著者が決定すべきである。

サービスに関する要素（コピーエディティング、組版、投稿システム、ホスティング、正式な品質チェック）は、アウトソーシングすることができる。

### 原則 2

**すべての学術的成果は即時かつオープンに共有される。**

研究者は、学術成果物をオープンに共有し、他者がこれらの成果物を無償で適用、再利用、発展させることを認める。この原則は、完全かつ即時のOAを提供するというプランSの全体的な目標を支えるものだが、プレプリントや査読報告書など、すべての学術的アウトプットを含むよう、その適用範囲を広げたものである。

### 原則 3

**研究結果の信頼性を確保するため、品質管理プロセスはコミュニティベースでオープンなものとする。**

学術コミュニティが品質基準を設定し、承認された品質管理プロセスを通じてモニターする。外部のサービスプロバイダは、必要に応じて、技術的チェック、査読、編集評価など、学術コミュニティによる品質管理を支援するためのツールを提供することはできるが、プロセスのルールを設定することはない。

これらのプロセスの結果は、査読報告書を含め、オープンな品質管理を実現し、信頼を示し、さらなる精査を可能にするために公表される。

### 原則 4

**すべての学術的成果が研究評価の対象となる。**

すべての学術的貢献が研究評価において考慮される。その価値は関連する研究コミュニティによって決定される。このアプローチは、ジャーナル名やインパクトファクターのような派生的な指標で得られるものよりも、個々の論文の質的な貢献をより包括的に評価する基礎を作るものである。

### 原則 5

**各関係者が、研究者主導の出版エコシステムの持続可能性と多様性を支持することを約束する。**

研究助成機関、研究者、サービスプロバイダなどの各関係者が、資金、専門知識、サービスなどのリソースを活用し、コミュニティ主導による出版の発展と導入を推進することに合意する。さらに、すべての学術コミュニティとのオープンな対話を通じて研究者主導のイニシアチブを支持・改善していく上で、助成機関やその他の関係者は、書誌多様性、学術分野の違い、認識論的伝統の特異性を尊重することを約束する。



## ミッション



上述のビジョンと原則に従い、私たちのミッションは、オープンで研究者主導のコミュニケーション・エコシステムへの移行を促進することである。研究コミュニティと連携し、助成金の要件や研究評価プロセスを通じて、これを実現しようとするものである。

## 参加の機会

研究者主導のコミュニケーション・システムは新しいアイデアではない。既存の優れた実践を基に拡大・発展させようとするものである。付録では、「出版・査読・キュレーション（PRC: Publish-Review-Curate）」と呼ばれる具体的な事例について説明する。

コミュニティベースのコミュニケーション・システムが発展し成長していくには、支援が必要である。現在の出版システムを一夜にして変えることも、特定の関係者が単独で変えることもできないことは明白である。学術コミュニケーションの中心に学術活動を置きたいと考えるのであれば、研究者、サービスプロバイダ、助成機関、研究機関が協力する必要がある。

研究者は、研究成果の普及により積極的な役割を果たすことが求められるだろう。そして、査読前、査読中、査読後といった様々な段階で研究成果を共有する自由を得るだろう。しかし、また、査読に対してよりオープンに貢献し、この学術的対話が編集者の判断だけでなく、コミュニティ全体に利益をもたらすようにする責任を負うことにもなるだろう。

サービスプロバイダは、学術的な貢献を管理したり妨げたりするのではなく、それを支援し拡大するようにサービスを調整する必要があるだろう。

最後に、研究助成機関や研究機関には、本提案の原則に沿った実践を奨励し、それに報いることが求められるが、それにはいくつかの方法がある。第一に、研究助成金および評価の方針や実践を通じて、研究者が研究者主導のコミュニケーション・システムに参加するようなインセンティブを与えることができる。第二に、研究者主導のシステムに沿ったインフラやサービスに対して財政的支援を行うことができる。そして第三に、その招

集力を利用して、その他の主要な関係者、すなわち研究者、研究機関、学会、サービスプロバイダをまとめあげることができる。

cOAlition Sのメンバーが、提案された本戦略を将来的に採用するかどうかは、コンサルテーション後に行われるcOAlitionと個々のメンバーによる決定プロセスに委ねられる。仮にcOAlition S助成機関が提案された戦略を採用し、パリックコンサルテーションを通じてこれを修正したとしても、COAlition Sは、APCベースの完全OA出版、Subscribe to Open (S2O)など、既存の（そして新たに登場する）OAビジネスモデルを当面の間、引き続き支援する。しかし、本戦略を支持する助成機関が、いずれはこれらの原則に沿ったサービスを提供するサービスプロバイダの利用を増やし、そうでないサービスプロバイダの利用を減らしていくことが予想される。同様に、本戦略を支持する研究助成機関では、研究者の評価に、インパクトファクターをはじめとするジャーナルメトリクス（評価基準）を利用するのではなく、新しいコミュニケーション・システムによって実現される完全な学術的記録を活用した評価を行うようになるだろう。

以下の表1は、ここで提案するシステムへの研究者やサービスプロバイダの参加を支援するために、助成機関や研究機関が取りうるアクションの選択肢を示したものである。本戦略の実施にかなりの柔軟性があることを示すため、これらのアクションを3つの異なる厳密度（レベル1~3）に分類した。

例えば、cOAlition Sや個々の助成機関は、早い段階でレベル1のアクションを採用し、その後、適宜、段階的に次のレベルのアクションを採用することができる。また、助成機関は、他の関係者と協力して、これらのアクションに取り組むこともできる。例えば、[CoARA](#)のような、すでに研究評価の改革に焦点を当てているイニシアチブの後に続く事が合理的な場合もあるだろう。

アクション	レベル1	レベル2	レベル3
<b>研究助成金・評価の方針と実践</b>	研究者主導のコミュニケーションの奨励。具体的には、研究者が研究の著作権を十分に保持できるよう支援し、査読前の研究成果の出版や、出版後のオープンな査読への参加を促進する。	プレプリント、オープンな査読報告書、オープンデータの公開を研究者の評価に明確に含めることで、これらの実践を行った申請者を評価する。評価者には、ジャーナル名、インパクトファクター、ジャーナル論文の数を研究者の評価に用いないよう指示する。	申請書類からジャーナルメトリクスとジャーナル名を排除する。
<b>財政的支援</b>	研究者主導のコミュニケーション・システムの原則に沿ったサービス（プレプリントサーバー、査読およびキュレーションサービスなど）を提供するプラットフォームに対して、透明性のある料金の支払い、または／および、助成金の支給を行う。 研究者主導のコミュニケーション・システムのためのダイヤモンド出版モデルとインフラを財政的に支援する。	従来の出版モデルに対する予算を徐々に減らすことにより（例えば、ハイブリッド・ジャーナルや定期購読ジャーナルを含む契約を段階的に廃止するなど）、研究者主導のサービスへの予算を増やすことを確約する。	査読報告書やキュレーション報告書など、関連する学術成果物やサービス成果物の公開を支払いの条件とする。
<b>招集力</b>	他の主要な関係者を集め、この新戦略における各関係者の役割について議論し、研究者主導のコミュニケーション・エコシステムを導入する際の最適な方法を特定する。	他の関係者（研究機関、学会）と連携し、研究者主導のコミュニケーション・エコシステムを開発・支援する。	他の関係者とともに、研究者主導のコミュニケーションへの支援者・インフラ提供者・擁護者によるグローバルコミュニティを形成し、オープンアクセス・コミュニティから、グローバルな研究者主導のコミュニケーション・コミュニティへと移行する。

表1: 研究者主導のコミュニケーション・エコシステムの構築のために助成機関や研究機関が取り得るアクション



# 8

## コンサルテーション

本コンサルテーションの全体的な目的は、以下の通り。

- 本提案の草案のビジョン、ミッションおよび原則が、（cOAlition S助成機関の助成を受けている研究者もそうでない研究者も含む）研究コミュニティのニーズに、どの程度応えるものであるかを判断すること。
- 『責任ある出版に向けて（Towards Responsible Publishing）』の提案が、研究コミュニティのニーズや期待に確実に応えるものとなり、その結果、より広く支持され導入されるようにするには、どのような修正や改良を行えばよいかを理解する。
- 導入に向けて、草案に含まれる可能性のある障害物や予期せぬ結果を特定し、それらを回避するための積極的な対策を提案する。
- 本提案を既存の学術コミュニケーション・インフラがサポートできるかどうか（サポートできる場合、どの程度できるか）を把握し、サポートできない場合には、インフラを強化するために研究助成機関などが資金を提供すべき分野を特定する。

本コンサルテーションの実施期間は、2023年11月から2024年4月までとする。研究コミュニティの参加方法の詳細については、以下を参照のこと。 [www.coalition-s.org/towards-responsible-publishing](http://www.coalition-s.org/towards-responsible-publishing)

# 9

## 結論

プランSイニシアチブは、これまで以上に多くの研究をオープンアクセスとして利用できるようにすることを可能にした。しかし、これは主に、Read & Publish契約やAPCなど、極めて不公平なビジネスモデルを通じて行われてきた。さらに、出版前の査読という現在の慣行は、研究成果の共有を不必要に遅らせるものであり、また、査読報告書や編集評価にアクセスできない状態のままである限り、責任ある研究評価を支援するものではありえない。

ここに示す提案は、研究者主導のコミュニケーション・エコシステムの開発と支援を通じて、これらの問題を是正しようとするものである。このアプローチは、既存の優れた実践の基に発展させるものであり、[欧州連合理事会](#)および[ユネスコ](#)による近年の結論に全面的に沿ったものである。

# 付録

## 研究者主導のエコシステムはすでに存在する

### 事例紹介

オープンサイエンスの原則を支える研究者主導のコミュニケーション・システムが、実際にどのように機能するのか（そして、すでに機能しているのか）を示すため、特に可能性が高いと思われる「出版・査読・キュレーション（PRC: Publish, Review, Curate）」モデルを取り上げる。このモデルでは、学術成果を確実に完全かつ即時に共有するために、学術コミュニケーションを3つの中核的機能（出版、査読、キュレーション）に分けて考えている。ここでは、編集者ベースのPRCモデルの特徴に焦点を当てる。しかし、cOAlition Sでは、学問分野の違いを含め、既存のコミュニティベースの取り組みの多種多様性に留意し、徐々に収束していくことを期待しつつ、研究者主導のエコシステムを広くオープンに支援する。

### ステップ1：著者が未査読の出版物の出版のタイミングを決める

未査読の出版物（いわゆるプレプリント）は、正式なガイドラインチェック（著作資格[authorship]の条件、盗用、データの利用可能性、言語、倫理審査の承認、ガイドラインなど）が行われた後、専用のプラットフォーム（機関リポジトリ、分野別リポジトリ、プレプリントサーバーなど）でホストされる。このサービスを提供するための費用を著者に負担させることはない。プレプリントはCC BYなどのオープンライセンスで公開される。読者には、これらの未査読の出版物に対して非公式かつオープンにコメントする機会が与えられる。

### ステップ2：著者が正式な査読を受けるタイミングを決める

非公式のフィードバックを受け（そして、それに回答した）後、ある時点で、著者は、現役の研究者が管理する質の高い査読プロセスに投稿し、本格的な査読を受ける。このサービスを提供するための費用を著者に負担させることはない。

査読プロセスの目的は、著者が論文を改善するのを助け、読者がその論文を出版されている文献の文脈に照らし合わせることができるようにすることである。

査読編集者は、編集者の評価や査読プロセスの要約を提出するが、論文が出版にふさわしいかどうかの推薦を行うことはない。

このプロセスで得られた査読（署名の有無に関わらず）、著者の回答、修正版の論文および評価は、オープンに共有される。

### ステップ3：キュレーション編集者が出版すべき論文を選定する

関係者の中でもキュレーション編集者が、どの査読済み論文を自らが編集する（オーバーレイ）ジャーナルやプラットフォームに掲載するかを決定する。選考基準には、例えば、一連の論文の質、独創性、テーマの一貫性などが含まれる。査読編集者とキュレーション編集者の役割は両立させない。



**Plan S**

Making full & immediate  
Open Access a reality